繪本寶鑑

下

1992.8.13

上野吉敏藏

[illegible]一体大祖師の法[illegible]
二人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
一体和尚[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

九十九 祖師 釈迦如来
百一 将行恒[illegible]
百三 月下大笑
百五 [illegible]子
百七 除[illegible]栽松
百九 [illegible]狗子
百十一 [illegible]子[illegible]山

一百 桃花恒道
百二 丹[illegible]木佛
百四 [illegible]
百六 [illegible]蓮華
百八 [illegible]山[illegible]子
百十 [illegible]祖
百十二 [illegible]子

百十三 馬祖

百十四 二祖立雪

百十七 栢樹子

百十九 善化

百廿一 睦別

百廿二 四睦

百廿四 大陸龜話

百廿七 丹霞霧[illegible]

百十四 托鉢[illegible]

百十六 二僧[illegible]

百十八 [illegible]

百二十 [illegible]

百廿二 俱胝豎指

百廿四 [illegible]

百廿六 石輩[illegible]

百廿八 仰山紅榜話

百廿九 金牛飯[illegible]

百卅一 高亭横鵠

百卅三 南泉斬猿

百卅四 [illegible]樹上

百卅七 [illegible]

百卅九 南泉牡丹

百四十一 [illegible]

百四十三 南泉茅鎌子

百三十 白鹿[illegible]

百卅二 [illegible]

百卅四 [illegible]

百卅六 女子[illegible]

百卅八 [illegible]

百四十 [illegible]

百四十二 大中天子

百四十四 [illegible]

百四十六 維摩不二法門
百四十七 除淋活埋
百四十九 黄山獨弓刀
百五十一 烏鳥三木梳
百五十三 牛頭鮎禅師
百五十五 慈照一盆水

百四十六 文殊無着問答
百四十八 黄檗毒打
百五十 茶盌覆却
百五十二 東郎茂般の多羅
百五十四 拵子一斤石

九十九 祖師 時代不同

伏羲聞大聖釋迦如來と申奉れハ。固地陶師なり
志より上求菩提下化衆生乃勅力たりしまれ。このゆへに
三祇百劫の間無量の諸仏を供養し。六度の行を
修し。菩薩の道を行じ給ふ。第三祇満の時。迦去迦
葉仏にあひ給ひ。こづくら仏となりて我志を又人の
ために説給ふ。こゝにおゐてなく迦葉仏の補処の弟子と
なり。終に人弓生を離れて。即兜率天に生じ百劫
乃弓法のおゐを経。衆生の根機熟するを見て。降身
ならば時到り機熟するを見て。中天竺
摩訶陀国浄飯王宮に下り給ふ。これ第一の相なり。

次に周乃照王二十四年甲刀にあたりて。天王の中國摩
竭陀國淨飯王宮提波羅樹下にして。四月八日の中夜に
摩耶夫人乃右の脇より。誕生なり給ふ。次に七葉の
波附より。お乳の臺をまいしくけ足ども。父ゆるし給ひ。
明年十九壬申八月十五日の夜半に。神駒にめされ。
波慈尼の車匿童子に駒の口を御せ。鞍に伽耶城を
踏檀特山に至る。阿羅く伽羅摩仙人の所におゐて。
始て出家志給ふ。次に太子仙人の無所有所定を習ひた
まふり。須臾にして得給ひ。太子ゆゑ八苦お離
生死の法に悦を。此人に此仙人の処をおくて。又蔚多羅
摩子仙人の処に至り。此人無定を習ふ。須臾にして。

又得給ふ。これも お乳の[illegible]にはゆるゞと。苦に於て二仙を
もてて。尼連禪河の邊に至り。六年苦行志給へり。是
得生年二十の蒼十二月八夜。明星あらはれ。法行已
波。すなわち雪山をお[illegible]せんとの時に法の魔兵魔
軍ホ障をなし。太子大祿定に入威神力を現じ。八千
乃魔衣等を降伏なし給ふ。次に摩何陀國の正覺
山菩提樹下にして。心を持し。鶏座し。才に祿定に得し。
金剛座を發て。[illegible]を唱給ふ。次に此座を起にして
華嚴を說。三七日の說法なり。此乃通別圓三大乘をん
擬しも契ひ。そのとき世尊自理寧說法をやめて
疾涅槃より入ぬしと。又思惟すらく。爲去法仙おの

化等いうんと象し。三乗方便をとらんとは。尓時十方諸佛現
前して。善哉釈加如来第一之道師なりと。讃嘆志まふ。
釈尊自理彼二仙人ハ吾家初の出家れ師より。先これを
度せんとおりひ給ふに。彼二人の仙をすでに死せり。しかれど
陳如十力ハ母乃一門迦葉の家鞞陵梶物梨太子ハ父
乃種族なり。ことに尼蓮禅河ゆく。六年苦行乃と記。
父の命をて。此五人給仕せしめられど。今波羅奈国鹿野
苑にありときく。いざやゆきて度そんとて。華厳尼
場を起し。鹿野苑に起き給ひし時。中海にして。梶
理彼利の二長者に値。仏を供養じ奉る。即為に五
戒十善れ法門を説。これを梶謂經といふ。これより鹿

野苑に至るとき。彼[illegible]等五人これをきくていく。
太子或ハ苦に馬し。衆に馬し。何の実恨かあるんだ
とひこゝに馬るとも。問訊をなるれ。時に太子相
好魔海にして馬る。初に陳如おもへを座を起く。
太子を請じ水を起く足を洗りしむ。そのうち佛法
佛生滅の法を説。初の将法輪に。陳如一人初果
を得たり。第二第三の将法輪に。又比丘等。ことごく
なしとかの得を。是阿含家初乃説法なり。まるこ
第二章經のよろく起れとこゝろ。蓋四十二章經ハ
ちくやねん第二乃説法なるべし。老教經ハ涅槃会
よれ得入滅の前。掬尸羅城沙羅双樹間におゐて

これを説。説法乃以第。華嚴阿含方等般若法華
遺教なり。これ五時乃説法ともいへり。法花涅槃の極
大乗にいたりて。前の三教ハこれ。方便なりと説故なり
仍滅れ法。偏に大乗に執し。小乗の經律等を廢
て。多心教迄ならんことをおそれて。遺教とさ給ふ
是滅と志給ふ。是乃成乃第七のれなり。四十九年二百
余會の説經。これに至て竟ぬ。そのうち二月十五日太祖
にして入滅志給ふ。是成乃第八乃れなり。以上八相成道
乃次第なり。仍法漢土に渡りしハ後漢明帝永平十一年
摩騰法蘭の二梵僧四十二章經を持来飜釈渡通也
我朝に渡りしハ欽明天皇十三年に百濟國王貢進に。

附て釈迦仍
像金銅像一
軀幡蓋經論
等と獻ど稱
目大臣向原ち
と建聖德天
子四十五ちと
造意し。月本
仍法乃ちまさ
となり。深熾
盛なりけれ

出生　天上　天下　唯我　独尊

見星悟道

吏禄宗乃源八始鹿野苑より終拔桜河に至りこゝに
於て二中間いまだ如つて一字を説ず。説已三百六十
會一大時教に至つて只二箇一箇の方便なり凡又
千年八十道理を説法くさず。仏法ハ言語のよりあらず
あらず自説自悟て成佛を得べし。故に世尊一枝
乃花をとつて善宮花に見せ給ふに只大加葉のみ
破顔微笑しく仏乃旨を得たり。正法眼蔵涅槃
妙心を以て摩訶迦葉に付属し以て笑沈を
廿八代して達磨に至り六代して曽溪に至り六代
しく陰際に至り八代して黄龍に至りなると
なり。御ありまぐらて家つなる也

百　桃花悟道

福州乃吳雲志勤禅
師初海山に在て因
に桃花を見て啓悟
せり。迺曰三十季来
劍客を尋ぬ幾葉
を落し又枝を抽に逢
自一たび桃花を見て
しより故直に如今に
到て交り
疑ひとなし

百一　擊竹悟道

剡州乃香嚴智閑禪師初游山に參じて契りぬ。辭して南陽乃忠和師乃世臨り抵て穢。一日周に帝に草木と艾除く瓶碌を以て弁と擊竹起却をなし。像り失笑しる乃。鄭紀として自省して乃偈と述て曰

一擊に不知を忘れ。又に修治を假ず処て醍醐は。
色色の外威儀法方を連ねの有ることを上て機と

百二　丹霞木佛

丹霞嘗洛京惠林ちに到天の寒り値て木仏とれ。これを燒院主これを呵。霞がいわく。吾燒て舍利とれん。主の曰木仏豈舍利あらん

や。龍が云ふ所なるべし。何ぞ我を貢りんや。院を拾り
眉髮隨落れ

百三　月下大笑

茅山一夜山に登り經行し忽に雲開けて月を見て大笑ふ一毫澧湯の東九千里小應さり。居民とぐ久偶東家明辰造に相推問して直に茅山

に至れ。流水の云。昨夜和尚山以に大笑を。李翱詩を續く曰。幽居を撰び得て。聖清に憾ふ。終年遇れ。ことなく赤逐れとなり。有時直に孤峯頂に上り。月下雲を披て笑ふと一部

百四　猪頭

散聖にして常に猪頭を食せ。沼居賛曰。癡繩纜鼎爵年を忽見猪頭叫ぶ。如此皈去年明時路

五湖烟景白鴎前と云く

百五　蜆子

是も散聖なり。事跡頗る異なり。何れの許の人といふをしらず。京兆府の蜆子和尚と云ふ。住居処さだまらず。心を洞山に即きてうけ、俗に閩川に混じ、??に??一衲??

被遂日に江岸に蝦蜆をとりひろひくらふて腹とし、夜ハ東山の白馬廟の紙銭の中に宿を居民見て蜆子和尚とよぶ

百六　知門蓮華

知門祚禅師に僧問ふ、蓮花未だ水を出ざる時いかん。師の云、蓮花。云、出て後いかん。師の云く、荷葉

百七　臨濟栽松

臨濟の雲禪師黄檗に在て松杉を栽れ次ぐ。黄檗乃云深山裏に許多の樹を栽て麼とかなさん。師云一は山門のために境致とかし。二は後人のために標榜となさんと。道了て鄉路を將て地を打て一下す。黄檗の云しかしといへども吾二十年を喫し了まり。師また地をうつこと一下をいへて。嘘て。黄檗の云吾宗此に高く大に世に興らん

百八　葛山婆子

葛山の雲禪師園に葛山下に一婆子有拵詩を。乞僧あつて問。葛山の路甚なるに向くか去。婆がいく筈に直去。僧繼行三十歩。婆が云好蓮

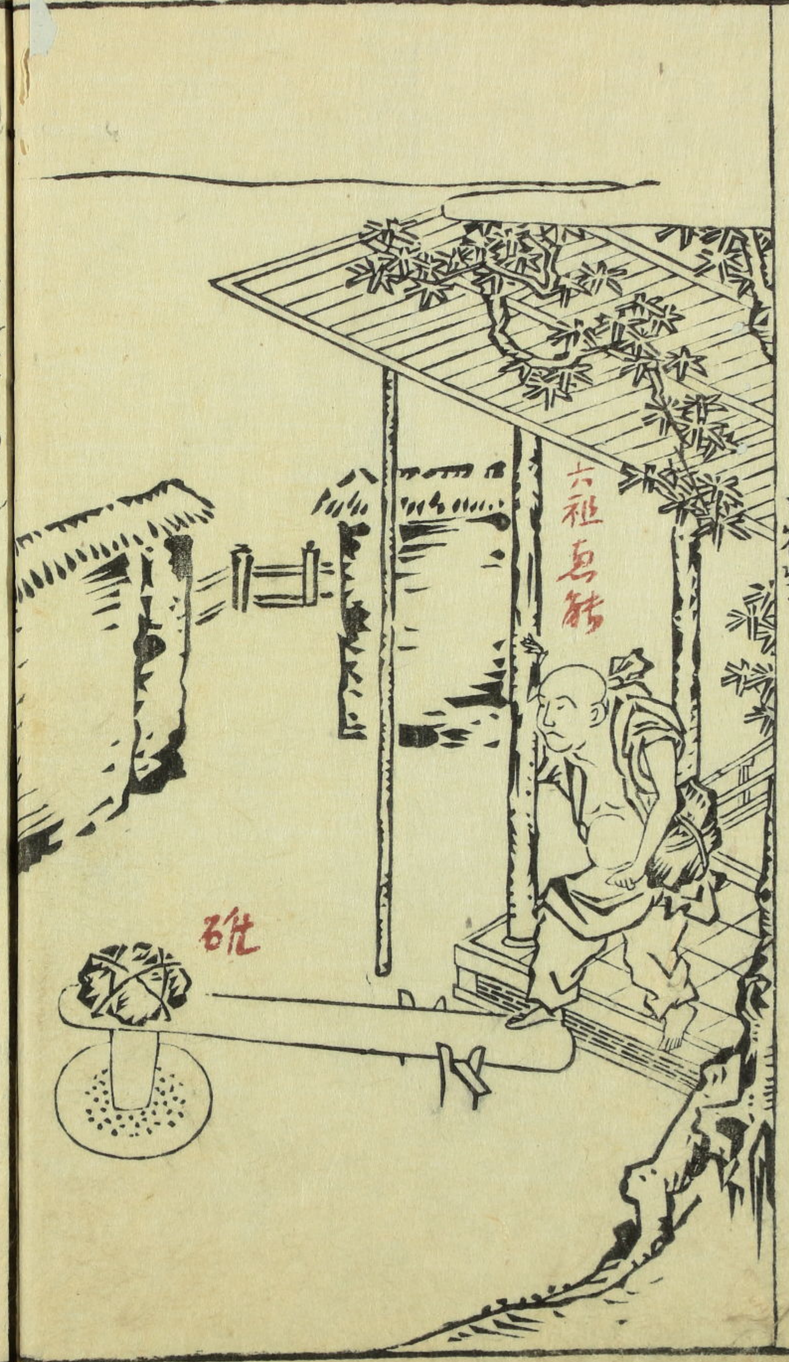
此師僧を又怨麼に去。婆に僧あり。師に拳似を
師の云。待家去て為り這婆子を勘ることをん。明日師
僧去て亦かくのごとく問。婆をまたかくのごとくこたふ。
師聞て乃ち深意して。前の云々に云臺山婆子我
為に勘破しつれりとや

百九　趙州狗子

趙州に僧問。狗子還て仏性ありや。またなしや。
州のいはく無。又問一切衆生みな仏性あり。甚によつ
て狗子に却てなきや。州の云業識乃所ることを
云々

百十　六祖

六祖惠能初見五祖に黄梅に謁して法乳を投
じ遂りて石を擲に員て。ひて鼓舂乃務を供せ
ば僧臨洲に問て云。石室行者雖を踏。什麼の為



に脚を稱却しうこと絶えて。淵のいりく。深坑に没溺ることゝ又碓房の問答なり

臺作坊

船子夾山

透列范亭乃船子連城禪師。芭操高題にして。安童那ならば心を菜山に印じてより。道容の思ひと同名の吏となるに。菜山をたるるに泊で。乃二の同志に偶て曰。公に各一事に拠く。菜山の家首を建立す。弔うまれつき。ことゝいや志ゝ志く。唯山水をこのむ情を楽しみ自然。所能なし。他様に我不止の処を志らず。もし美利の座主にあつぐ。一人を指来れ。或形稱する小塔ならば。生平の切る所を拘く。先師乃恩を執ぜん。遂に分携せ。透列范亭に至て。一の小舟を泛て。縁り随て日を度れ。以て四方の往来の者を接

時の人を高僧とあつたまふ。よつて船子和尚と號を
一日船を岸急より泊て閑坐を。官人ありて問。如何是
和尚日用の事。師撓子を竪都ていく。今ナ。官
人の曰。會せば師の曰棹清波を撥て金鱗遇と
罕なり。師偈あつて曰。三十年來鉤鷹に坐を鉤
已往に黄龍を得たり。金鱗あれば。定く力を労
を。絲綸を收れて皈去來。道吾師に。京江に到
夾山にあふ。僧問ぬ何なるこれ法身。山の曰法身
無相。曰如何是法眼。山の曰法眼瞎なし。道吾
笑ぶして失笑を。山をなつら下座。吾客に請
問。某甲適來。這僧に祇對をう。話かなしば

よりしぎることはつて。上座を志て失笑せしむることを得を。
望しいは上座慈悲を吝ざまを。客の曰和尚一等に是
出世來師ならざるを。山の曰某甲甚処にか。是望し
ないは為に説破をし。吾の曰某甲俺に説ば。請加尚
都て花亭の船子の処より往去れ山の曰此人如何。吾
の曰此人上に所居なく下に卓雅なし。和尚のさしば
脇を易く住ばし。山の方衣を散じ米鬢ことごち
に花亭に造れ。船子纔に見て便ち問。大徳の道
の為にかの住をう。山の曰寺ハ即ち住せば。住をれば即
住せば。師曰住せざる甚だ何ぞ。山の曰是目前
の法にはしぎや。師の曰甚れの処にか学得來る。山の

曰耳目の到れ所にはあらざれば。師の曰一句合れの後万部
の鑿驢橛。師又四糸を垂ること千尺。之深潭
に在り狗三寸を離さゞく子何ぞ首ざる。山口を突かん
と擬せ。師又打。山豁然として大悟せ。乃ち點ぬ
ものと三下。師此日竿頭の糸線若が弄せらるを
清波を犯さば。之なのづから殊なるを。山遂に四海を
拋ち狗を擲。師此之ぬ師の曰糸深あに無く
深ふ。あるを此之を定む。山曰。後雪を帯て路なし
舌頭續ぐ後ぜば。師曰江海を狗を志て。今鑣始
遇山乃身を撞ふ。師曰如是ことに遂に属志くいて。
向去直にすべからく。身処を蔵し。跡迹を没し。跡迹

没せ処に身を蔵せことなるべし。吾十年茅山に在祇
斯事をゆむ。汝今すでに切なり。他様に城隍要落
に住とかれ。但
深山の裏後頭
辺に向く一ケ
半ケを見れて
接續志く斷絶
せしむることなれ。
山乃辞志く行。
斷くに回顧せ。
師。遂に周梨

と喚。山乃首を回せ。師撓子を竪起して曰。海ありて
得ず。別に有と。乃船を覆さく。水に入て逝すと也

百十一　野鴨子

百丈海一日馬祖と拄
山せ。野鴨子を見て
問くいはく。是甚ぞ
丈の曰野鴨子曰甚
処にか去。丈の云飛過
去。祖遂に手を
て百丈の鼻頭を捉
丈いたむこと忍とかれ。

祖曰何ぞ曾く飛るか。丈是に於て大悟せ明日
小参く。祖座に陞れ。丈出て面おの礼有席を
出て部に。祖便ち下座

百十二　馬祖

鼻をひねるハ弱
祖なりひねらるゝ
ハ百丈なりされ
詳に
明らか
なり

百十四　托鉢下堂

高峯東山にあつて飯
既たり。一日飯遅し。德
山神を發めて法堂を
下。雪峯廼曰。續いまだ
ならば鼓いまだひゞかず。
老和尚神を托て什方の
処にゆひさう。德山部
方丈に皈れ。岩頭堂中
にあて同ぬく。堂を
掛て曰。大小德山いまだ

来ぬの句を會せず。德山峯をきつて侍者として
既を喚で上りしむ。問。你を傳を肯はざるや。既。高山に
その意を啓せ。德山来り上堂話話毎常に
異なり。既。僧堂前にあつて堂を拆して大に笑
且喜しらくは。堂既老漢末後の句を會するむ
しを。他ぬに。天下の人
いかんともせざらん。しかれども。かくの
ごとしといへども。さぐ三年の活を
ぬん。後り三年にしらく果
他を
とも

百十又　二祖立雪

初祖因に傳神光といふ
ものあらく来り參ず。祖
謂座して海厲を安と
なし。座下に立。遅明に
積雪膝に齊し。祖憫
ぞ問ひ曰。汝久しく雪
中に立。まさに何乃度
とかもしむべき。師悲涙
しきて曰。惟願くハ慈照
に其露門を開く廣

離苦を度し給へ。祖の曰諸佛無上の妙道曠劫に精
勤しく行じがたれと能行ず。豈小徳小智輕心慢
心を以て。真乗を冀ハんや。師少已て。利刀を取
て。ぞづから左乃臂を斷。祖の前に置。師となりて
曰。諸仏の法印因とを以て。祖の曰諸仏の法
印人に從ひてもらふに。曰我心いまだ安からず。
乞師安心せよ。祖の曰心を將来れ。汝がために安心
せん。曰心を尋ぬるにふかうなり。祖の曰汝がためにあり
安心し竟れり。又記して曰。汝祖外に諸緣を息内心
喝ぐことなく。心墻壁のごとくハ
以て道に入るべし

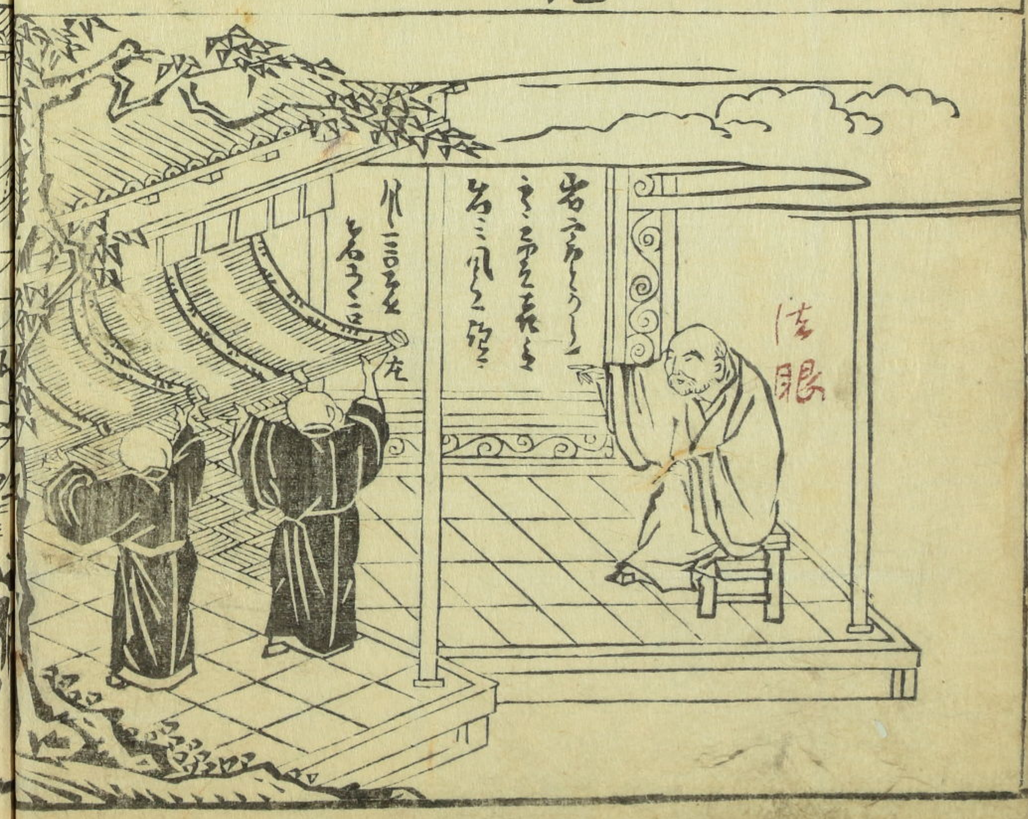
百十六　二僧墨籠

法眼因り赤前に上
魚を師るを以て
籠を持。附り二僧
なり。同じく去て籠
を求て

師曰

一切

一失



百十七　栢樹子

趙君觀音院。又曰東
院從諗禪師曹列
郝鄉乃人なり。姓郝
氏。真像大師と從し
僧問如何是祖師
西來意。師云座右の
栢樹子。僧乃云和尚
境を持て人に示れ
しなれ。師のいはく。
我境を持て人に

示さんに僧れ云如何兄祖師西来意。師の云座お
拓樹子
百十八　を讓開獨
江西小榮乃讓禪師
湖塘乃亮也を問伏
しく居る師兄先師
の書と畫切くり暫く
請瞻礼せん。師曰
と叫く。胸と撥開て来
も亮使ち礼ね。師曰
礼もるすなれ〳〵。

亮の云師兄請也。乗甲師兄と礼せど。師の曰
湖先師の書と礼せよ。亮の云什ナ事ぞ来
として礼もることなりしむ。師の云何ぞうて請ん

百十九　普化
結別乃普化和尚
ハいづまれ不乃人と
いつすとしらんに盤
山に師とし是へて
乃此地に移て行
行を或ハ城市或

き。塚ろ一澤を振て曰明既に来るべ明既り行ん。
晴既に来るは晴既に行ん。四方八面より来るべ旋
風のごとくにこゝん。雲霓より来るべ連架のごとく行ん。
一日隙淵僧をして捉絶めて曰惣て不恁ケ
来るされいん。師拓開きて曰来り大悲院裏り
弁あり。僧回て。淵に拳所を淵の曰我従来
這漢を鋭見せ。凡そ人をみてはえるとなくみな
澤をふること一却せ。時り善化味当と号せ普化
一日街市の中に於て人に就て直裂を乞。人皆あふ
善化僧に要せば師陸を乞て棺一具を買しむ普化
内来る師の曰我ゆゑあふ筮直裂を做ゆるまり

善化使自擔きて街市を繞て叫で云隙淵我
ためり直裂を做ろまり。我東門に住て遷化せん。
市人競陸てこれをみる。善化の云。我今日いまだ
来る南門り住て遷化せん。かくのごとくすること
三る。人皆信せば才門るに至て人のきがひみる
ことなし。独城外に於て人ゆゑ棺の内り入て
行の人を請てこれに打てしむ。即時に仏希
せ。市人きそひゆきて棺を開くまるつち令効
脱去することをみる。祇宛中に鈴の響の隠
としてさるを吹メとこゝ。今雲上振鈴の圖を
以遷化の神を描し者也。此おまえ僧伽鈴鳴

とゝふことあり。これハ伽耶舎多幼少なりし時一の室
溫を持て十七祖僧伽難提のおにむかふ。難提問
て曰。汝円溫を持て何ととんとする。舎多高子
偈をいて答て曰。諸仏の大乘溫内外瑕翳なし。
毒人同見ることを得。心眼皆相似たり。父母この差
を異として名字をしむ。難提受て携て還れ。
化日風王殿の洞徑を減れ。澄徑として都を
發して復問ていて。給吽か。風吽か。答曰風に
あらず。給りあらず。我心の吽のことといへり。また
麻谷湯を振といふことあり。皆吽地をもつて
おもひしことに

百二十　拳頭

黄龍の心禪師室中に在て。拳を豎て僧に示していく。
喚拳頭と作む則觸。喚拳頭と作ざ
まば則背れ。いぶ
喚ぐ甚麼とかなえ

百廿一　睦列

雲門初め睦列に系志て。方に門を扣て。別揖て曰
道と。門驚て答に睡あらず。乃推出志て曰。秦の時

輾轢鑽隨くその
龐を掩く門が右の
足を換ぜ

百丈一　俱胝竪指

禍列令範山の俱胝
和尚始房を以て居せ。
居実際れその志を激
房せるを以て方に業
大の心あるを。俱胝とて
天龍房に到り之に因
て。具に実際。房に到
の緣を陳て拒て天龍
一指を竪て示て師
即領悟せ。まさに寂を

しめさんとする秋。衣に俚曰吾天然海南三藏三勃陀
一指頭禪一生用ひ盡ぬ之法を奄化せ〻と

百丈三　回瞻

一人ハ佛鑑和尚
岡相寺ハ住持也
虎ありかゝりて
ねむるハ。室山指
頭の二人なり。虎
を又ねむまり。室
山指頭ハ仏鑑の
指子と云語也

百丈　祇林揮劍

湖南の祇林禾尚。毎に文殊普賢を比しきて みな
精魅とし。毎に木劍を持て自理降魔と才に傳
あり。無礼をれば。便云魔来わりく劍を以て乱
揮して方丈に帰れ。
是の如きること十二年。
後に劍を垂て言ふ
傳曰十二年お甚だと
志て降魔する。師曰
賊ハ貧児の家をおそ
十二年の後甚だ

隆麗せざる。師の曰賊ハ貧児家を打ぞ

百廿六　大隨亀話

大隨の眞猶外周に房の
かたりに一川の亀何里。
僧を亀を持て四。一切
衣生ハ皮骨を裏這ケ
乃衣生甚の為ゝ。骨皮
を裏む。師草鞋を拈
じて亀れ背上に置く

百廿六　石鞏張弓

接列の石鞏惠蕊猶師。常に弓箭を以て人を
接す。三平到。師弓を挽勢をなして云。箭を看よ。
三平避執勢となれ。
師云平生一張の弓。
一隻れ箭を架て。
只半ケ乃
聖人を
射切たり
と云

百廿七　丹霞　霊照菜籃

丹霞龐居士の門前にて女子霊照の菜を洗ふを見る。霞問ふ居士在りやいなや。照菜籃を放下して手を斂て立。霞曰居士在りやいなや。照菜籃を提起して去る。霞便去る。居士外より帰る。霊照居士に挙似す。居士乃云丹霞在りやいなや。照の云已に去る。居士の云赤土牛妳を塗

百廿八　仰山紅柿話

仰山の潙山禅師に随て山を経歴して遊ぐ。烏一の紅柿を啣で。師の前に落す。師ねぶく仰山にあたふ。仰山接取て水をもて洗ひてく却て師にあたふ。師の曰子甚麼の処よりか得たる

仰の云此毛和尚の道徳此威ばる所なり。仰の云
ゆゑ又宝ばらことをはじ即一半をもて仰山
りあらふとなし　採菓求に為を鵶に作る文少異

百廿九　金牛飯桶

金牛和尚新時に
到りごとに自飯桶を
持て僧堂前に於て。
舞をなす。時しも大衆
しらく云菩薩子
喫飯来と

百卅　白鹿老道

一人ハ洞山一人ハ神
仙乃密なり。白鹿
乃回答あり

百卅一　高亭横趨

江をあらそて拓くを
徳山なり。拓かれて。
横りけれハ高亭
乃簡禅師なり

百世二　鳥巣

道林禪師といふ。樹を鳥の巣などの如くして居給へり。鳥巣布毛とかくといへり。前は一人あるハ會通侍者なるも又鳥巣と白居易と問答あり。白居易ハ詩文のことを問へ。道をしらぬと云ふところにて。白居易も道を問へり。白居を鳥巣と問答ハ古松下とあれば松をさべし

百世三　南泉斬猫

東堂西堂猫児を爭ふ。南泉猫を挽て云。道得バ即不斬。元對なし。南泉猫を斬て。あ後となしぬ

百世四　徳山燒經

徳山婆子と問答の時。南語りつまるも。金剛經を燒れたりとなり

百歳　香嚴樹上

香嚴一日上壹。衣に示しきくいく。人此樹に上りて口り
一樹枝を銜。脚枝を踏ばる。手枝を拏ば忽に人あつて。
この人に祖師西来を問がごときんだ。りし他に答だ
即身を喪ひ命を失りん。他に答ずんだ。又他乃問所に
遂りん時に。
庞頭上座と
いふものあつて。
おとく云。樹
上をば即
問ば。樹下此

一句道得来れ。嚴呵と大笑をり

廿六　女子お定

仏在世乃時一の女子仏座に近く三昧に入。文殊仏足を
礼し已て白言此女人仏座に近ぼくことをゆるされども。我は
近づくことあらば。これはいかなるゆへぞ。仏の曰汝此女人を
覚せと。文殊尸利指を弾く覚せども覚ぬ。大喜都
にて喚どもさむべからば。手を投て牽どもさむべからば。
又神足にて三千大千世界を動かせども猶亦さむべから
らば。文殊覚せことあたはずといふ。この時佛大光明
を放し。下方世界を照し給へば。棄諸蓋菩薩来て
面足を礼せ。佛。棄諸に仰て彼女人を覚しむ。棄諸

即時に持ち
深けぐ。此女
三昧より起。
文殊ふぼん
おがして仏に
問ふ。仏告て
曰ふ此女より
因て初て阿
耨多羅三
藐三菩と
發せり。この

女人ハ棄法蓋菩にちつく阿耨多羅三藐三菩
と發せり。是故と仏ハ汝是ことなくなれば
百世七　昊祐陽瓶
百丈海禪師淨瓶
と持て問ていく。喚ぐ
淨瓶とるはことをえば
海喚ぐ什ナたるな
さん。藤林の曰喚ぐ
未撲とるもべからば
百丈乃昊祐に曰祐
淨瓶と陽倒しく

便ちかき云百丈第つて曰。第一座物却せりと云
往本文なりけれゆへり。十一を摘拔と

百卅八　六祖風幡

儀風の初即宗法師
法性なほて。涅槃經
を講ぜし時。六祖ひき
乃ちに寓らる。因風
刹竿の旛を動。僧二
人ありて對論を。一ハ
幡動といふ。一ハ風動
といふ。往復をて。契

理をはじ六祖の云風の動にあらず幡の動にもあらず。
仁者乃心動なり。僧言下に於て大悟を即宗。ひ
そかに此經を聆て誅としたりとかや

百卅九　南泉牡丹

南泉彩禪師因
に陸亘大夫の云。聲
法師也甚奇怪也
天地同根万物一體
と道ことを解を。
師。座前乃牡丹花
を指て云大夫時の人

此一様の義をしることを夢れどくお仰たり

百四十　竿頭を要
石霜和尚僧問
とおもり。云。百尺
竿頭より尚我
進むべしと

百四十一　乾峯一語
乾峯に僧問十方薄伽梵一語涅槃門未審
語頭甚ぞ乃如何あれ。峯主丈と拈起して

別一別しく云。這裏にあり。僧雲門に語意
を。門扇子を拈起して云。扇子踏跳して。三十
三天に上りて
帝釈乃鼻
孔に塑ぶ。
東海鯉魚。
打と一棒あ
盆を傾くるに
似たりこと

百四十二　大中天子
唐乃憲宗に二子あり。兄ハ穆宗弟ハ宣宗

宣宗ハ大中也。
香嚴志閑和
尚今下にて。
刺髮志く。大中
香嚴と共なり
亀山は拝行し。
潙に頭して大
中訪作られし。
其時乃あり蒲
とうつに
なるぞ

百字三　南泉茅鎌子
僧向南泉の道何れ此不
ぞ。南泉のいはく。二十文錢
なり買切なりと。又こゝぞ此
ごとくとんば。
生ひ切なく
西り快と
いかれなり
とも

百四十四　若財一枝草

文殊一日若紡をしてく茶をとらしむ。若紡大地を徧観に。茶にあらずといふものなし。此紡を文殊りゆゑ。文殊の曰。これ茶採れ事れと。若紡遂に一枝草を指じて。文殊に与ふ。文殊悦却して衆に示して云。此茶亦よく人を殺し亦よく人を活すと云り

百四十五　維摩ふ二法門

維摩会上に三十二菩薩各ふ二法門を説。文殊乃曰我一切の法にあらずして无言无説无示无識法門答をなすれより。是を并乃入ふ二法門とは。これにあらずして。文殊維摩詰に問。時に維摩詰默然として言なし。文殊歎じて曰。善哉く。乃至文字語言をなし。是并真の入ふ二法門なりと

百四十六　文殊無着問答

文殊大士無着と茶とのこと結びしがされいら玻璃盤ととつて。無着あり問ひてのたまへ。當ありしを

て這ケありや

いるや。無着の云

無。文殊の云よれ

法〇なれとおもて

か茶と喫とるや。

無着對る

ことなし

百四十七　臨淅活埋

臨淅善信志て地と淅

黄檗の云困耶臨淅

の云躍も也峯ばなり

なれとも困志まん黄檗

仮打。臨淅棒ととつて

しゞめて黄檗をつき

たとは黄檗維那に

我とおこせといふ維那近くおんで云。和尚争かこの

風頭漢乃無礼なりとゆるさん。黄檗起て仮維那

とうけ。臨淅地と躍て云。法方ハ火葬。我這裏ハ一

時は活埋せん

百四十八　黄檗毒打

黄檗運猶師一日裴

桐園と行次。農夫乃

田を耕すを見るに泥

深うしてく牛ゆくこと

なきこれ。若夫役打。

裴惻然としてこれを

憫む。師云毒打。裴の

云。大吾知識何ぞかく

乃ことをとなり。

師の曰。夫隻脚兒耕とを行ぜと

百四十九　茱山獲間刀

茱山乃儼猶師雲巖

と遊山す。獲間刀

刀雪巖の云なにとの

ち毒をなれ。師をなつち

刀をねいく。茱馬は

祈却をなせるとし

百五十　茱鑑覆却

雪峯洞山に在く飯頭となる。茱を淘次。洞山問

砂を淘て茱を去り茱を淘て砂を去り。師の云。砂

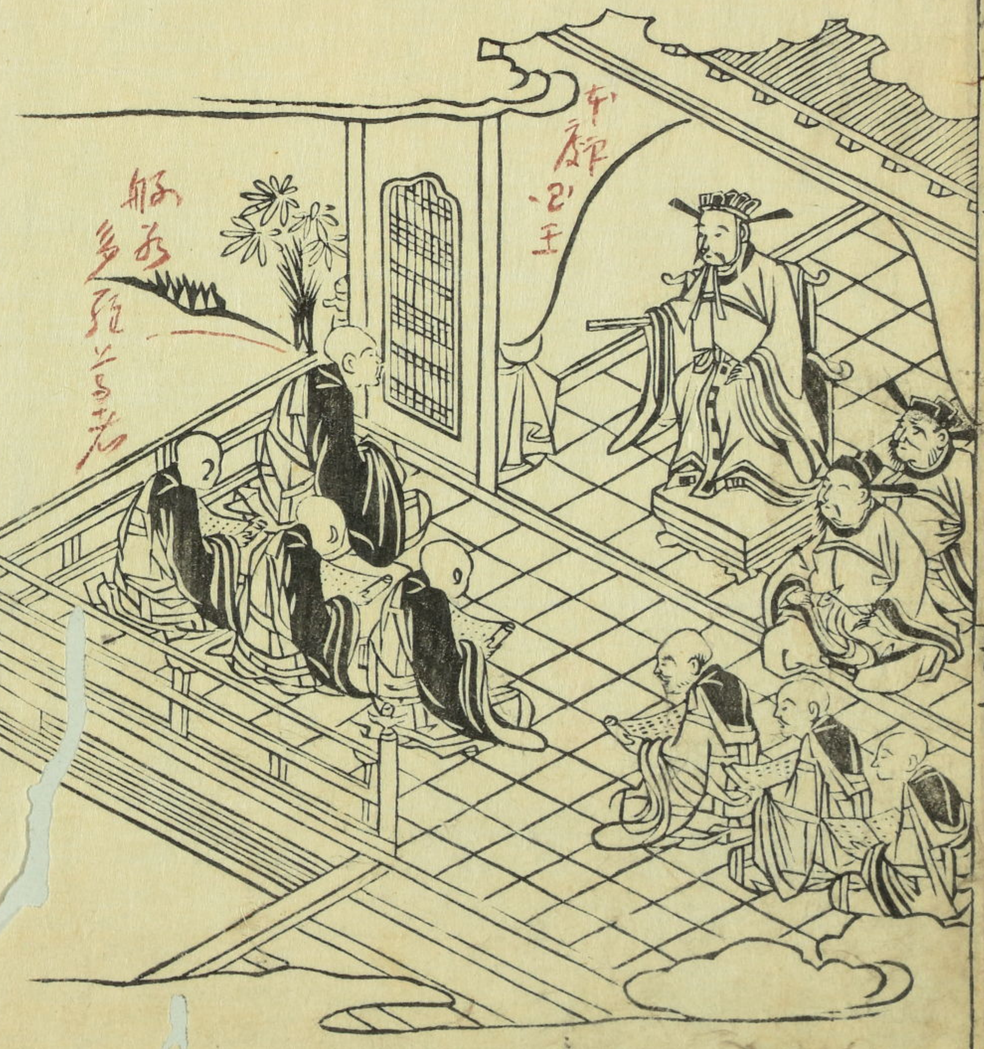
茶一時に去。
山の云大元ケ
甚麼とう喫
すん。師遂に
茶盃を覆却
す。山の云子が
固縁り固ハ。
德山に在ばきりと

百丈千一　高峯三末越
雲峯に存稱師、出世開山に好。大元千百人り
盈師三末越とかくく人を接す。凡僧あつく。

末魚さす。
まだ輥お
しくこれ
とあれ
と
えく

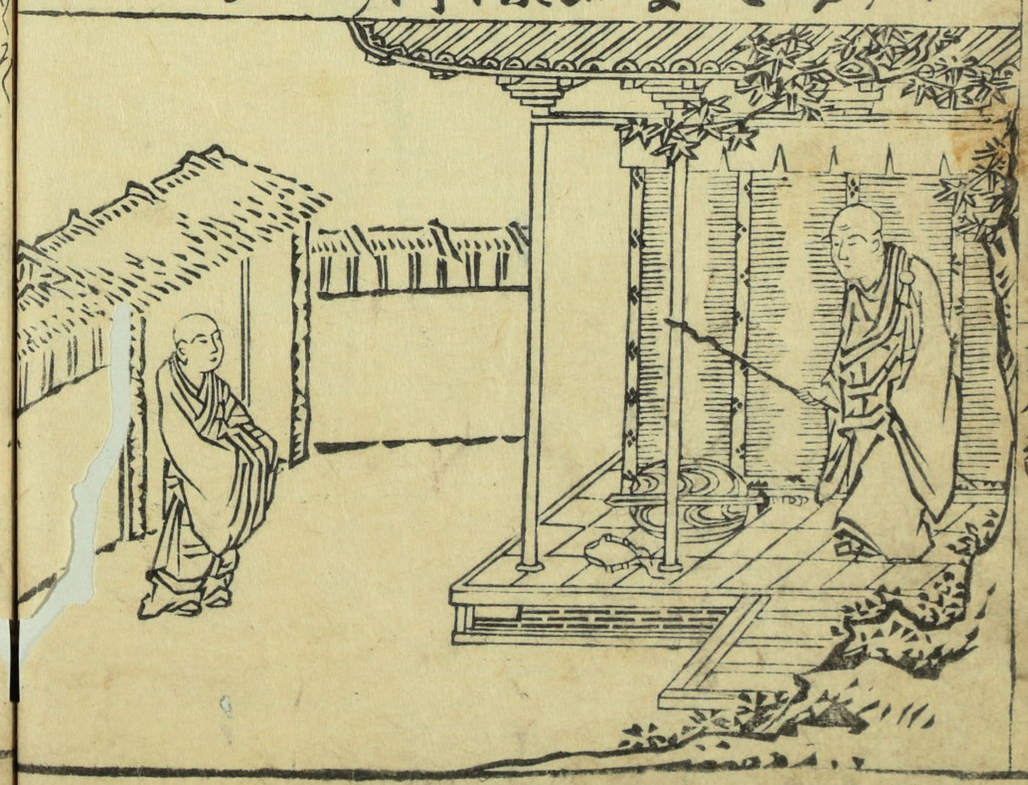
百丈千二　東印度殺若無雜問答
東印去の西王殺若多羅爲者を請じて齊を
すゝ法ぬぐく。王すれつら同法人とぐく經と物ど。
唯師のこゝにとしくう物どける。師云貧道

お息衣縁
り渉ど
入息法界
に居ばれ
稱にかくの
ごとくれ經
百千万億
光を將ど
と



百字三　牛頭融禪師
融禪師山に草庵
を結で居るれば。百鳥
花を含ぐ動じられ經
に見えて好い鳥もとつ
さりしとや
百字に投子一斤石
投子ち家り大廣石
あり。鳥羣と四答の
とき投子石に持て曰
三世法仏裏許にあるを

百六十五　慈明一盆水
慈明の圓禪師一日あ
ぐ門に拄て一盆水を
安く。上に一口の劍をよ
こゝへ。下に一雙の草
鞋を置く。拄杖を横
に掛て座を。僧の門
に入を見ると便指。僧
擬議を。師すれば
拄をとゝ



繪本寶鑑卷第六目錄

百六十六　達磨辯玉
百六十八　一指を立
百六十　一花を立
百六十二　一葦を立
百六十四　面壁を立
百六十六　德山入門棒
百六十八　烏臼拄

百五十七　武帝達磨
百六十九　隻履を立
百六十一　御衣を立
百六十三　板歯を立
百六十五　結鼎大蘿蔔
百六十七　深明二上座
百六十九　德山未跨拄

百七十 南泉一虎問答
百七十一 文殊無著問答
百七十二 僞山仰山搗茶問答
百七十三 藥山枯者
百七十四 婆子焚菴
百七十五 鈴僧滅燭
百七十六 首山竹篦
百七十七 曹山同部
百七十八 盤山糖肉大概
百七十九 南岳磨磚
百八十 南泉黃檗
百八十一 迦葉作舞
百八十二 南泉一多和
百八十三 仰山半月話
百八十四 仰山劃一劃
百八十五 資福一圓相
百八十六 南陽忍無作
百八十七 厭居士[illegible]問答
百八十八 黃檗虎聲
百八十九 麻谷打場
百九十 百丈野狐
百九十一 黃檗大儀渡
百九十二 洞山猶未搗
百九十三 布袋
百九十四 阿闍世王
百九十五 悟達國師

書于安由子越之繪本窰鑑之後
目録之端
龍跳取明水　湔瑕窰鑑清
傳神千歳後　光耀昭群生
岫雲軒主林元叟題

百五十六　達磨辨玉

達磨ハ香支王乃第三ノ子也あれとき大王帝有の玉といぐさまたたに見せ

らきなるに、第三の王子ハ此むまことの寶にあらざれ、
私ハ仏法あらざくハ室とおもひぞと、仰られなると
なり、その座に殺若多羅そか近臣おもくなりて
しが、皆此ことばと感じなるとなり、殺若多羅ハ
大王乃此寶依なるも
百五十七　武帝達磨
梁乃武帝因に初祖達磨大師西天より海に
浮び来りて金陵といふ所にいたる、帝に見る
帝問、如何是聖諦第一義、師の云廓然無聖
帝此云朕に對するものハ誰、師の云不識、帝
契ハ、師遂に蘆と折て江と渡て魏に至る、

浮に帝
挙志て、誌
云に問、誌云
の云、陛下
聖なくは
人と識や、
帝の云云
らば、誌の
云、これハ是
觀音大士
仏心印と

佛ハ帝の云まゝに仕者をしてこれを詔せざる
徳の云ひしことなれ陛下詔せんと圖ふ人去とも他
亦回らじ
百五十八　一指達磨
達ヂの語に
云
直指
人心
見性
成佛

百五十九　隻履達磨
初祖達磨涅槃とかし給ひけば熊耳山の呉坂と
いふ所り葬るとなり。後三年めに魏王の使者宋雲
といふもの西域にゆきて遠れ葱嶺といふところ
にて達ヂの手に履を隻ばさえて西にゆくに
あひたり。達ヂの云ひしが自人已り代を脚ふ我ハ西
西より西去と。宋雲なるにとも云ふ處なれやらじ。西
来れば帝果して崩じ給ひぬ。後魏の孝莊帝
に奏す。帝はれいら。達ヂの此墓を發きて
見給へば尸骸はなく志るくしてゞ履隻あり。遂に
勅を奉て此隻履を和く少林なり修をしれ開え

十二年花發
ちの中より
竊去れたり。
後にまたこそ
所在を
失ひし
とかや

百六十　一華達磨
一花開五葉
放庭雪没
人腰

百六十一　御衣達磨
神洲赤縁接
大象根
東土西天示
衲僧様

百六十二　一葦達磨

廓然無聖

逆龍鱗一葦

横江

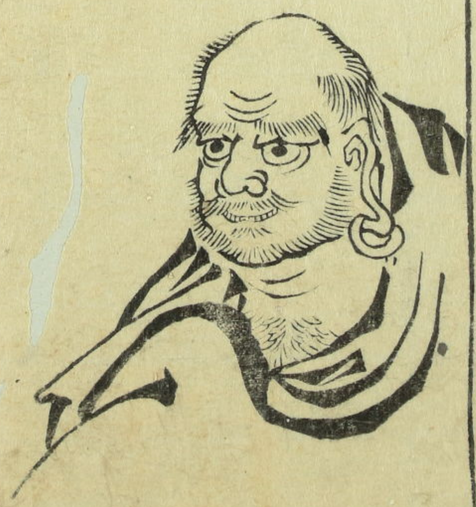
百六十三　板歯達磨

希叟達磨忌拈香

不紹金輪尊貴位

被人打落

當門歯



百六十四　面壁達磨

達磨嵩山の少林寺に於て。面壁せらること九年。人これを測となし。時にこれを壁観婆羅門といふ。偽灯第三に云。師梁より魏に渉り。洛陽少林に至。面壁して座せり。九年を經て二祖に法を傳へしとなり。達磨初めハ三祖教

乘を以て為行ぞ。故草に心印と傳て執を拾り
宗を說ぞ所謂教外別傳不立文字直指人心見
性成佛也

百六十五　鎮州大蘿蔔

傳曰趙州一
兼聞和尚
親南泉に見
と。是否。州曰
鎮州に大蘿
蔔頭を尋
とこそ

百六十六　德山入門棒

德山の鑒猿
師初蜀に
在て金剛
經を講ぜが
ながゆへり。
用金剛と号
ぞ。故南方
の禪宗を
聞く。敬ず
南車に。疏

沙を載て罵をお初新潭に身を沈山り世世にて
仏度を立ぎ凡僧此門に入を見ては仮様
百六十七　深明二上座
源明の二上座因り淮河にいたつて人の網を
垂にひとりの羅網より垂れ出れを見れ明
上座の云源見後なるかれ一に箇の網僧に似
たり源の云しるをかくのごとくなりといへども
初網羅のうちよりいらざるがよきにはしかじと
明の云源見なんじ悟を知ることなりと源上座行
ことこそ罪にして
方より者もと云

百三十八　烏臼棒

烏臼禅師小僧問を
訓甚要。云。定別師
の云。定別の法乃這
裏と何所。云。別なら
ば。師の云。若なら
ばんば。更に被中に
持ざれと云て。便
打。僧は云。持ぬに
眼あり。若なくこそ
人を打ことなかるべし

師乃云。今り一ケを打ぬとて云て又打こと三下を
僧便おさう。師の云。屠棒えぬ人の喫すること
あるなり。云。打柄和尚の手裏に何ることをいうんが
さん。師乃云。汝若要をば。山僧汝り回与さん。僧
無なきて。師の手中の棒を奪て。師を打こと
三下。師の云。屠棒こと。僧の云。人の喫すること何
あり。師の云。若しに小ケの漢を打ぬと。僧礼拝
師の云。却て与麼に去や。僧大笑してお。師の云
渚は無麼渚は無麼
百六十九　徳山来跨棒

徳山小冬。花に示して云。今夜答話をば。話を問

者ハ三十捧時ニ偽
ありあらく礼となす。
師便打。偽云某甲
活也。四ぞ。言るゝ
便打。師の云なれど
ハこれいづれの事の
人ぞ。云新羅人。師
の云。いまだ舩艦り
跨ざるとは三十棒
と与ふよしと
云く

百十千

南泉一虎問答

杉山の賢禅師。西家南
泉は三人お伴て道を
虎りけり。後に南泉
西家より問。先の虎ハ何に
所なるぞ。西家の云。猫児に
所なり。西家又賢禅師に
さへば。猫に所なりと西家
又南泉に問。泉の云。大
虫に所なりと

百丈一　又孫無著問文殊曰。近離何處。曰。
近離南方。著曰。南方佛法如何住持。曰。
末法比丘。戒律廣行。著曰。大約多少。曰。
或三五百。或八九百。著曰。某甲到彼中。
與他佛法大有利益。為伊住持。為不。曰。
汝若到彼。不可住持。著曰。何故。曰。汝
無威德。著曰。某甲實無威德。若到彼中。
不敢住持。便去。著到彼中。纔陞座。大衆
作禮。著便下座。大衆驚愕。著曰。汝不
是文殊。我不是無著。

百丈一　又僧問。如何是佛。曰。即心是佛。
又問。如何是佛心。曰。非心非佛。又問。
如何是道。曰。平常心是道。又問。如何
是平常心。曰。擬心即乖。又問。如何即
是。曰。我尚不知。何況於汝。又問。和尚
既不知。何以言即心即佛。曰。為他止小
兒啼。又問。止時如何。曰。非心非佛。

百丈一　又僧問。如何是佛。曰。即心是佛。
又問。如何是佛心。曰。非心非佛。又問。
如何是道。曰。平常心是道。又問。如何
是平常心。曰。擬心即乖。又問。如何即
是。曰。我尚不知。何況於汝。又問。和尚
既不知。何以言即心即佛。曰。為他止小
兒啼。又問。止時如何。曰。非心非佛。

百丈一　又孫無著問文殊曰。近離何處。曰。
近離南方。著曰。南方佛法如何住持。曰。
末法比丘。戒律廣行。著曰。大約多少。曰。
或三五百。或八九百。著曰。某甲到彼中。
與他佛法大有利益。為伊住持。為不。曰。
汝若到彼。不可住持。著曰。何故。曰。汝
無威德。著曰。某甲實無威德。若到彼中。
不敢住持。便去。著到彼中。纔陞座。大衆
作禮。著便下座。大衆驚愕。著曰。汝不
是文殊。我不是無著。

百丈一　又僧問。如何是佛。曰。即心是佛。
又問。如何是佛心。曰。非心非佛。又問。
如何是道。曰。平常心是道。又問。如何
是平常心。曰。擬心即乖。又問。如何即
是。曰。我尚不知。何況於汝。又問。和尚
既不知。何以言即心即佛。曰。為他止小
兒啼。又問。止時如何。曰。非心非佛。

受戒しるやいるや。無量の曰受戒しくくし。義の曰。汝
の執心なるんぞ。なんぞ受戒を用いん。無量辭して
退く。義童子におそうしむ。無量童子に問ふ。
語うて見多少ぞ。童大徳とらぶ。無量應答を。
童乃曰。見多少ぞ。無量復問て曰。しをばいづれの
處とかしる。童の曰。しハ全剛窟の般若なり。無
量慢然恨。彼義ハ即文殊なり。再びつくべし。
即童子と鞭背しく。乳ハ見。一言別れを為と。
童偈を説く曰。面上に嗔なし。他裏の具に裏
り嗔なく妙香を吐。心裏り嗔なし。見珍寶。
無垢無染見常と。言訖て。均挽もちを用く

照れぬ。
但みる
の雲れ
中に文
殊金毛
乃師子
に乗て。
往来す
れを見る。
忽に白
ゆゑなて。

東方より来つて覆て見んだ。時より塗列菩提寺の僧
修政等あつて云ふ。尚山石震吼乃却と字無着
因て湯を以て毫山りとゝめぬ

百七十二　偽山仰山摘茶問答

偽山仰山と茶をつむ次。偽曰終日只子が却と字て。
子が耶と見んだ。仰遂に茶樹を撼かれ。偽の曰。子こゝ
に用を得たく。其耶を得ざ。仰の曰和尚いかん。偽永久
志て在て。仰の曰。こゝ其耶を得たく其用を得ざと
偽の云。子より三十棒を放て。仰の曰。和尚の棒乗甲
喫て。乗甲棒誰と志てゝ喫をしめん。偽の云。子より
三十棒を放てと。雲覚の云。且原色無千雪に

百七十三　藥山拈者

藥山乃儼獨仰。一日道客雲覆。雪仰深と接山

なり夷様の樹乃一枝ハ葉へ一枝ハ枯たるを見て師乃曰。葉者花者花者花か。君の云枯者花。師乃云酌能して一切処々枯清しむ。師又雲巖に問。巖云葉志花。師の云。酌能して一切処光明燦燦

去志めん境沙深に問。沙深の云枯者境他枯ことを。葉者境他葉ることを師。道吾雲巖を回顧して云ふ花ふ花

百七十四　婆子焚庵

むかし婆子あり。一の房主を供養して二十年を経て。沙深より二八の女子に花のごとくなるを。えらびて彼を遣て結伝をしむ。一日婆子かの女子にとへて房主をいづくきつかせて。正当恁广の時如何といりむ。房主の曰枯木寒岩に倚三冬暖気なしと。女子論て婆に挙似す婆の曰。我二十年祇ケ此漢を供養しけるとて遂に遣ありて房を焼失ふと也

百七十五　龍潭滅燭

德山周り。鈴潭
累住種師り
造て。即時り
辞しまんとす。
鈴潭これを留む。
一夕室外に於て
黙座を。鈴潭高
何ぞ吸来げり。
徳山對て曰黒。
鈴潭乃燭を黙

漣山に与ふ。漣山接と擬を。鈴潭便吹滅。漣山礼拜。
鈴潭の曰。什ニ尺ニ見ルニ。今より向去。天下ハ和尚の
舌頭を疑ハ。明らかにいてる。便發。鈴潭徳遠に謂
曰。可中一ケの漢なり。牙劍樹のごとく。口血盆に似
たり。拵折せ。ハ之と回らさん。他時孤峯頂上に向
て。吾道を立ことしたんと云ふ

百七十六　首山竹篦

首山竹篦を指して。傳に向。喚ぐ竹篦となさば則
弱。喚で竹篦となさざれ。ハ背く。且道喚甚ニ
とかなさんと。葉縣ハ省禪師竹篦を取打て楷
下に拵たり

百七十七　曹山聞聲

曹山乃本寂禪師徒却ちを守て乃云河耶と河耶と。僧
の云。和尚甚麼ヶ作。師云我心を打ちたれ

百七十八

盤山 嘗て書肆に於て得一客人乃精肉を買を見る。屠家に語て曰。精庭一斤を割取れ屠家刀を放下して又手を云ち更明箇

盤山 備用大悟

是猪庵かくざる。師ぢん下に切つて投棄を

百七十九　南嶽磨甎

南嶽懐讓禅師南嶽に居せし時。馬祖禅に志篤く絶庵を。日々に唯坐禅して団に継く。師曰。汝は結跏するを。祖の曰坐禅して。行ん図る。そうで曰佛と作らん。懐讓禅師一日甎一所をもつて庵の前にて磨く。祖の曰ふを磨して何にか作る。讓師の曰鏡と作さんと要む。祖の曰甎を磨して豈鏡と成ることを得ん。讓の曰坐禅して豈成佛をえんや。祖の曰如何即是。讓の曰人の車に駕がごとし車もし行ずんば車を打が即是牛を打が即是。祖是に於て言下に悟れり。遂に心印を受し法を得て西祖の讖に馬駒踏

天下の人を殺すといへれ給ふ符。南家江西より聞く

百八十

南泉黄檗

黄檗の運
彌師固り
警信乃次
南泉の云。
如許の大勇
杖千此鬼
大笠を戴。
師の云三子
大千世界
總不裏許

あり。衆の云。王老師咏。師笠を戴く使行

百八十一　迦葉作舞

世尊因に乾闥婆王樂を献ず。其時山河大地是琴声
となす。迦葉起て舞をなす。王問迦葉豈是何姓
漢行て結滅已に是ふ何らぞや。何ぞ更に得聞を
佛のゝ聞て。實に得ゆるし。法を論ることなれ。王又
琴を持ちて三編。迦葉亦三度舞を作。王の曰。迦
葉舞をなれ。豈是なるぞや。佛のゝ聞て實に尊て
舞をなさば。王の曰。世尊何ぞ妄語を切るか。佛のゝ
聞て。妄語をば。汝琴を拒ばば。山河大地本不是く
琴却をなす。豈是なるぞや。王の曰。是佛のゝ聞て。

迦葉亦復
かくれ
ぞし。
この典
に實
に曾
舞を
なさば。
王乃
信受

百八十二　南泉一魚相

南泉願禪師
陶家麻谷と
同往く。忠國
師に謁せ中
路に至く。師。地
上に於く。一圓
相を畫して云。
道得ば即ち去ん。
家同相中り
於て坐せ。答

使女人相をなせ。師の云ふ麼ならば則さしば。家
云ふ甚麼の心行ぞ。師乃相喚ぐ回れ。去て國
師を礼せば
百八十三　仰山半月話
仰山寂禪師一日梵僧あつて来れ。師地上り
於て半月乃相を畫。僧をおして添て魚れ
とすしく
脚を以て抹却せ
師面るを展
僧拂袖して
使出

百八十二　仰山劃一劃

仰山洪州乃石亭に志て。粥後に坐せり。僧あつて問和尚畫て字を識やいるや。師の曰分に答ふ僧乃右に擬ると一画志て云。是なんの字ぞ。師地上に擬て十の字を書き。僧又左に擬て云。是なんの字ぞ。師十の字を改めて卍字となれ。僧一番相を畫志て。あくまを以て托志て。修羅日月を掌にしたる勢をなして云。これなんの字ぞ。師乃番相を畫て卍字を圍却。僧すなわち樣子の勢をなす。師の云。如是々々。此是法仏の護さしろなり。汝亦如是。吾亦如是。吾自護持せよ

其後礼拜しく室に騰くし去

百四十五　資福一斎相

資福は寶積
作周に陳操
尚書來師使
一斎相と畫陳云
弟子与麼に來
了元役とも云
ど相交て斎
相と畫に場ん
師中に於て
一点を悉陳云。

物理見南番乃舶主と師役方丈に論て門を家郎と

百八十六　南陽忠國師

忠國師因に傳あつて來れる西師一會相の中に日の字

と畫出せり。傳著ることなし

百八十七　龐居士仰霞問答

仰山居士にあつて相子を立厨居士露柱に指をなす

百八十八　黄檗虎聲

黄檗大雄山より。菌子を採來れる。百丈問て曰。大蟲と

アルるや。其時黄檗身のうちを虎のごとくなして。虎の聲

とせられたり。百丈斧を以て切勢を

なしたるなり也

百八十九　麻谷持錫

麻谷此徹禪師
錫を持、章敷の所に
いたり。礼をなし。禪
床をめぐること三帀。
錫を振ると一下して
卓然として立
章敷の曰
見こ

百九十　百丈野狐

百丈禪師上堂しらごとに一のを人あり。礼に随て法を聴。
一日礼しりそく。唯を人のことしれば。師曰。此人ぞを人の
曰。某人にあらざる。其の如葉仏の時より勇て此山に住せ。
因り学人問。大修行底の人。墮く因果に落やいなや。
某對て云。因果に落ず。然り。百生があいだ。野
狐身に墮。今請。和尚一物語を代し。先らくは野狐身
を脱せんことを。師の曰。此問を人の曰。大修行底の人
を因果に落るやいなや。師の曰。因果に昧らず。を
人言下に於て大悟しく礼をなして曰。某すでに
野狐身を脱せ。住して山の坂にしん。敢て乞。七僧

乃清に依て送進。師維那を志て白槌をしむ。衣に告て
食後に亡僧を送らんといふ。大衣裏議せらく。一衣皆
安し。涅槃堂に又病人あり。何の也ぞかくれどくなり。
食後に師衣を解じて山坂岩下に至る。杖を以て一の
死たる野狐を挑おせ。乃清り依て火葬せ。師晩に
至上堂。前の因緣を舉。黄檗便問古人猪一持語を
御對せらく。又百生の野狐身に墮せ。持て猪ぜんしケ
乃至ケにかゝるべき。師の曰をおし来れ。汝に向て道
黄檗をおしまらく。師を打て一掌。師手を拍て歸て
曰。我涅槃胡鬚赤と。又赤鬚故あることを。時より潙山禽
ちりせらく。典座となる。司馬政治野狐の話を舉て

典座に問。作ナ生と。座門前と撼せと。三下。司馬の曰

大麻生庄の曰仏法是遠ケの君理ならばと云と

百四十一　黄檗大儀後

黄檗徳行ありて母を離しさはまく泣くして肩
同となれり。故に大仏後とふまとりにて往来の人の
脚を洗ふ。これは黄檗来らば足に志れしあれば。是
をしるべりあるんとなり。あるとは黄檗りあひぬ。
母うれしさのまゝ。我はなんじが母よりいへば黄檗の
同一子出家すれば九族天り生ぜば天り生ぜばい。
仏は家徳なりと云く。母を河の中へ蹴いまなる。
そのとは虚空に花ふり。天人下降り母を超卒
天りむかへ給ふとなり。此仏参ぜばんだしるべ

かしば。若参ぜばんば癡人り夏を説なり。かく
給ふるまひ古今黄檗一人なり。他人ことをまなん
で。母を蹴ば首を棄をしまん。儒の黄檗を以
仏法をせむ給ふとなり。宣なるかれ。言語に付て
いかで。黄檗はこまふ孝の人なるべし。若母を
佛をしむる孝行といかで。路人知て顛倒をん。此
二ケの事ありいかにといかで。九天に雲起て十地
り風烈

百四十二　洞山独木橋

神仏密禅師洞山と独木橋を見。洞山先に見
て木橋を拈郭して云ふ見也。師云价周初。洞

山もなかち。本稿を放下せ

神仙ノ密称し

百ゆ千三　布袋

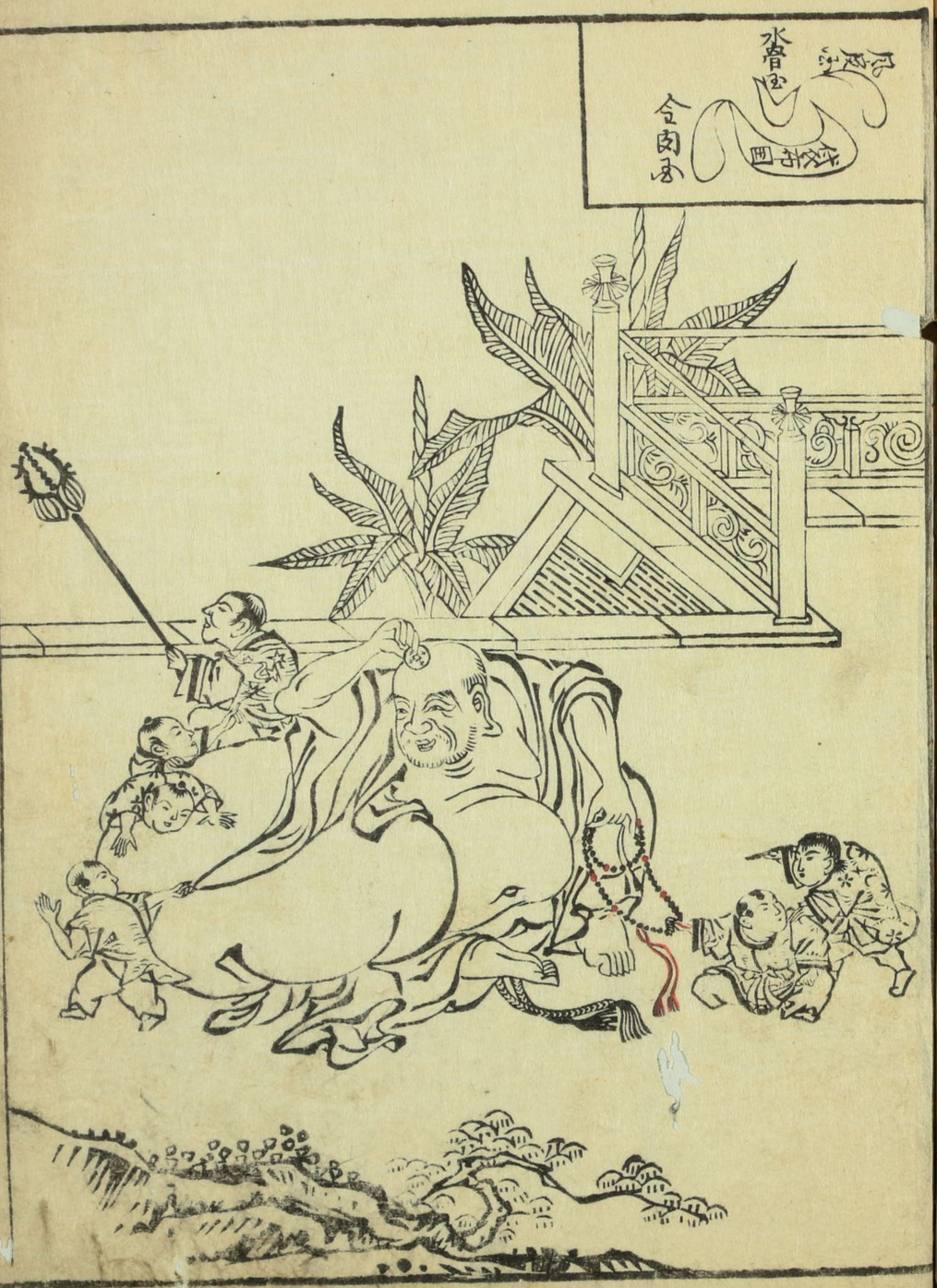
明朝の布袋和尚いまだ姓氏を詳にせず。祇あり腰腋たり。通衢閑市に往来に。或人問ひに出て有りとなす。答ひて云ケの人は来るをまつ云ひと来れり。答ひて云。此是這ケの人にあらず。或ハ布袋と解ず。百物俗にて。或ハ拈新しく人に示さしく云。這ケハこれ兜率内院庖。或ハ袋になぞらく果子を探りて傍に所にふ。傍接せんと擬せ。師すれハらまを繪ひて云。此是這ケの人にあらず。或ハ傍に行ゆるをまんとせるから肖を掛て一下せ。傍首を回せばせれハら云。我に一文銭をあたへよ。あるときハ

布袋は傳ふ終日熟睡せ。あるひは起て市鄰の間
にゆく。小兒譁しくこれを逐。あるひは杖杖をいく
こゝかれ。あるひは數珠をいく兒とともにたはふれ。
僧あつていかなるか是祖師西來意と問ば。遂ち
布袋を敷下しきて又手しきて立。僧云只これ別に
更にありあるか。乃布袋を抱て肩に負て去と
ことに。今給はらんに処れ布袋は。これなるも。又唐
の末。僧契此。形腰接にしてはるに布囊を負ふ
布袋和尚と号せと。又宋朝の明といふ僧和
しらく肚大なり。世に布袋と稱ず。又元の季宋
湖の法氏が男容貌つゝなるに。膨脹擁腫人誠

見て嫉笑。これ今圖せる處乃布袋に似たりと。
此内に又最りいふ事の志布袋にありや。既に姓
氏を詳せずとあれば。相尋ぬべし。是に法師て
恨に昔仏在世に。天竺の南にあるゝ論西あり。
袋布西といふ。四方八千里。又百年ごとに。それ國
窄狹なりしく。四方やう風く千里となれば。此時その
西乃帝。位をかふれといふ。仏在世にあるゝ王
と。火身王とぞ申ける志りるにまゝ。東北西に小濱
西ありて。東を風皮國といひ。北を水骨西といひ。西
を金完西といふ。皆方千里餘。時に兵を起して。袋
布西をせむ。袋布西は八千里なれども。又百年に

一度窓狹なり打花を伺ひ三国同時に世界しかば
君臣一日も寝食をやすくせざれば、しかるに佛通眼を
以てみそなはし、彼をあはれと想ひ給ひ、かの国に
海くんせさせ給ふが、かの国の国事海れ源去のこと
をはして、私後うごかば其時佛通力を現じて起
葉と与ひ、火身光輝かりいたり給ひ、微妙の
法を説き給へば、上郷相より下乞丐にいたるを
一国ことごとく剃髪出家を佛に論ぜて、義哉
国土、善哉衣生と歓喜しく、心をさして発去さ
まふ、さて彼袋布国八千度のたらひ一時に倒し、
大平の国となれり、又三の国にも仏法を伝へて、

皆山林に隠れぬ、年に苦行すること二十年、なかん
ばく農民患家をしかば、耕耘の業絶て、飢
におよんとは、帝王廩を發き、粟を發じて
賑をり、しかれども飢て死し、老て死し、少年計
計ひさだ尚り、国中の人民三を一に減ぜり、元来
夫婦同居をゆるさねば、苦行懇せぬともがらは、童
男の名をり餓れ、嬢婦のおもひ乱れ、あひ
殺伐をり夏おびたし、火身王かの強勇に驚
き、また人民の縁死し、金廩むなしくなりし
ことをなげき給ひしかふし、佛又天降り微妙
の法を説給へども、火身王以前の仏説を信じ



西去裏滅に及びしに、懲らしお合ぜ尓時佛大音
却りけらく、色即是色、色即是色とのたまへば、山河
大地震動しく、火身王を西民を、これ悟をひらきて、
山林を出て行を礼を、しられざるを、あられぬ色に戯色
嬢妬しらりし少年は、急り狗となり、寝室を
吠らく与り海涯り没しく失はなり、お坂山狗を
一出り侮らくこれを犬子国といふ、さて彼袋布西を
悟事してより、士農工商皆を職に帰して、富饒快
楽の西去となりしと、或箱のかくりしが、それを
行きれ経に入れ得りしと、同じ箱なく忍みて、更
ハしらべ、此かくぬ夏なぐら、布袋は国に語るとぞ

百九十に　阿周世王
阿周世王ハ和尚なるを。説法下りなつて。醉象を
ちなげ。世尊指を出し給へば。指れ給ひ柳門る
跡ごとく。象ひかれむ。師子法の勢ひ恐れわく。
象さらまちにぞなり。阿周世王放醉象世尊現
指頭獅子をとり

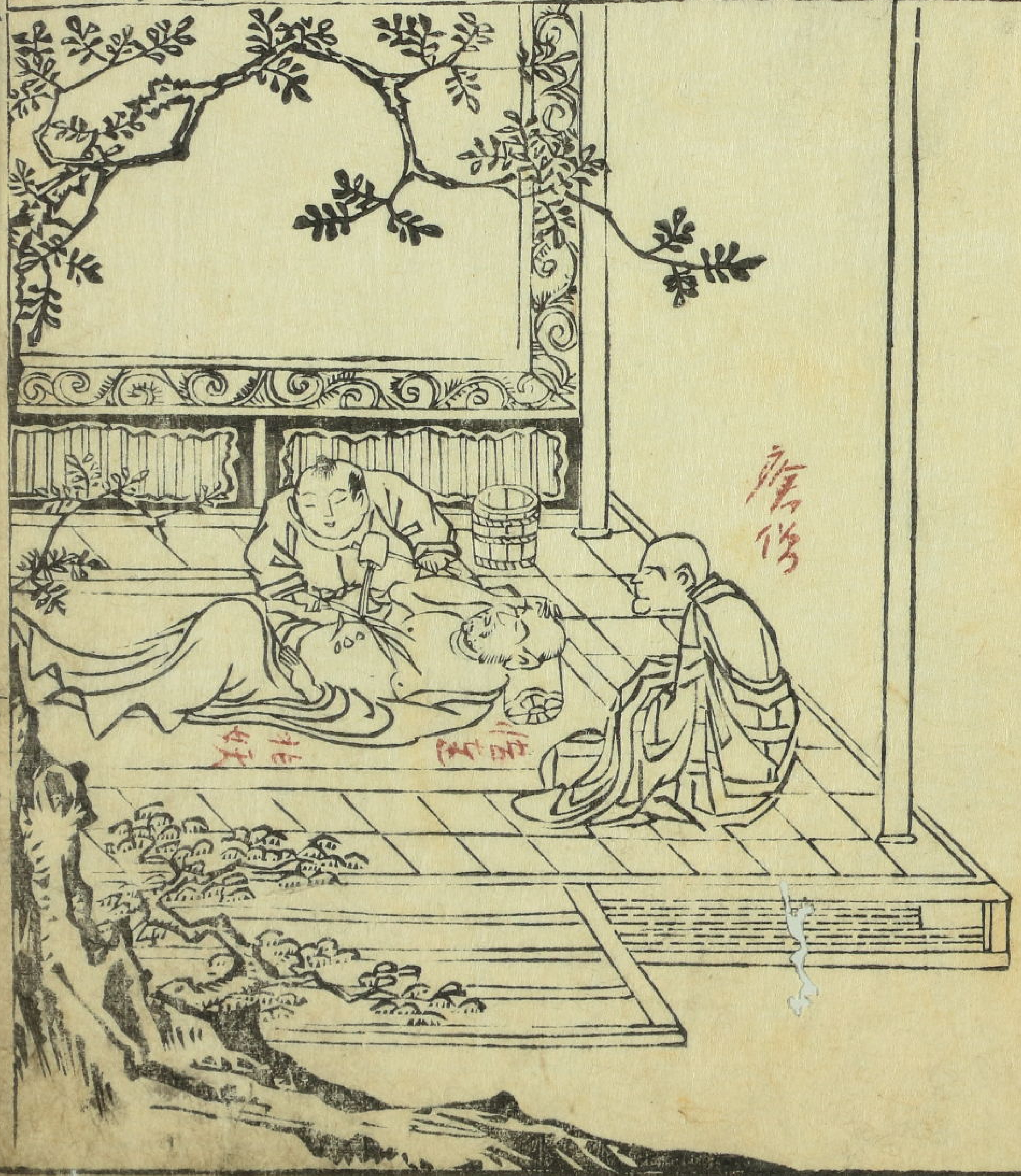
百四十五　悟達國師

昔悟達和尚に衆僧一千五百人あるを其内に一人身より
癢を生ず。衆僧是をうるさくおもひ。和尚の對面をよし
なしかたいひあひけり。和尚はなかりく。今日の人を着明日
は人より着らるゝなるひなりと。新出み。延壽堂の中に
まゝより垂てく夕朝の飯を給て。衣の下にかくして
与給ふこと百年目ばかりなり。日を逐癢愈く。古里へ
歸るに。和尚より此月は慈悲を謝し申さて又和尚難
まあふことはらん。さをはらばたち七日道歴く一時山より
山の巓より松に本はらべし。夢給へかたいひ給ひ歸りぬ。
其後悟達多内あつて。國師と号ひ。當后古里を經

國師腰より人面癢といふ癢出たり。此癢乃かたち。
人の顔のごとく。目をはり口をはり。渇すれば水をよび。
飢ればすれいち飯をよぶ。其初天地にひゞき。濤江驚
きさわぐ。衆僧をみれ。他の走り。侍者喝食もおそ
驚師を年子。もとより國師初朝の呪もかなわざりし
かば。以前の病僧乃とばをおもひいでゝ。急かく杖に弁
ら出。嶺山の巓より這咒出ばけん乃ごとく。二本の杖を
振延み出ば。寂しくして一鳥鳴ぎ。文り使来もひゞ
かざりしに。忽今厳樣國眼界にかやあり。いかなる
処ぞと見れば。以前衆僧の内の病僧門外に出て。
國師を行れ。僧の云。驚くことなかれ。國師の癢を愈

もつぱら修し給ひてありしかば国師席より降給ひ
ぬ次の日児童国師の手をひいて温泉より柳
の枝をとりて瘡を洗其時人面瘡声を出して
同時我をあらふことなかれ宿因あり我絶て
其時無量の観音現じて佛をおもひ掩ふ。
人面瘡白言我ハこれ兆素といふものゝめハこれ兆
妖なり。兆妖兆素を殺しその讎を報ぜんと欲して
まづ七世の生ぜしめより前ハ佛法さんげして
讎をかへすことかなはず。けふより今やうやく
懺悔のさとりをひらき隙なくしておもひ瘡となりて
讎をむくはんとせしかども今め傍僧をはなれて

為し大慈大悲を感じ。
今則ち去すと云絶
て。瘡ハ忽ち消
失せぬ。
国師ハまさしく
傍児童をと
礼し給へバ
傍の児童も
消失ぬ。



玉帥兄よりいはく懺法讀誦しきゝ而ひしと也。此書
首り楚莊絶纓あつて。楚王の仁心を感じ。出
来り。悔を人面の来由をあらはし。玉帥の慈悲を
欲ば事其中にハ。悔しきあり。捧手あり。畢しき
あり。欠ゝろあるゝ。ゝゝ兎園の語。胡蘆の笑ひのゝに
しきゝ。月を悔しむるゝゝゝひまハあらざりけらし。御
願くハ文辞を舍て。慈仁を覓めんと

いふこと

しるべし

繪本寶鑑後序

摂安由子訪予南華園茶談半日　不佞
曾識其人彼昔從五馬而臂蒼一且致
謝而漂泊蒼海速迮風塵而到于今雖
葆霹手又莫雷同之私越交膝於紫標
寓形於青壁　不佞也飲然于其間由子
解裝出一書披閲之元所見也此書也
嚮者在目録而文詞支離無名可名兵

今而由子芟補於其闕文重字乃逐一
窮其原且其辭女字而雖了角童蒙無
囁嚅之累義理亦自歷々始讀一項
無味再讀二項覺薄味遂讀三項至于
滋味直得甘蔗之佳境也厥畫也者出
于雲舟之嫡流筆法誠活然非世之筆
耕鴉点之辟焉蓋以口弄手翫之一法
示師聖交賢之一階繪本寶鑑勒為六卷之

名實在此豈與謳歌流言之冊齊架耶
惟夫令人得不俟一步而窺青燈樓之
功慈々在裏許於乎子之用意也於世
亦奚其幸矣也哉戊辰正月上浣隱市
植村氏一敬子謹跋昔貞享五年也

鹿書林

東武 平埜屋 清三郎

中華 小佐治 半左衛門

攝陽 貫器堂 重之梓行

西國卅三所 觀音靈場記 圖會 五冊 新板出來

世に觀世音の靈場多くありがたき事は萬人の知る事なり
かるが因る此度西國卅三所の靈場のおもうまゝかゝしてこゝに其種類
を記し繼起を引し又むしよう人にいたるを惡猶に能りしものの業て
うぞへがたしといへども其一二を出し也りまゝ人の面とし老人又は女の口く
よりきゝ居れがたくしてまゝ靈場にいたり其さに洋めるぬく山利益をかたつり
のまひなんと敬白 京三條西柳の場の用 場所 仁[illegible]